

# 尖閣喪失

大石英司

*Eiji Oishi*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画  
地図 平面惑星  
安田忠幸

目次

プロローグ

第一章

第二章

第三章

第四章

第五章

第六章

第七章

第八章

第九章

第十章

第十一章

第十二章

C★NOVELS版あとがき

——思えば遠くに来たものだ。

353      330 300 270 238 207 179 145 119 88 62 37 13 7

# 尖閣諸島周辺図



尖閣喪失

**In war : resolution.**

**In defeat : defiance.**

**In victory : magnanimity.**

**In peace : goodwill.**

(Sir Winston Leonard Spencer-Churchill)

戦争に於いて決断、  
敗北に於いて抵抗、  
勝利に於いて雅量、  
平和に於いて親善——。

(チャーチル)

## プロローグ

その日も、成田への高速はいつものように渋滞していた。車内から本省へ電話を一本入れ、該当者に乗せた日航機が、三〇分ほど遅れていることを確認した。機体が横付けする特別スポットの再確認を命じると、男は瞑目めいもくしてそのまま深い眠りに落ちた。

車は、空港ゲートで止められることもなく第2ターミナルへと進み、政府専用エリアに入ったところで運転手に起こされた。ブリーフケースを持ち、車のドアを開けると、空港職員が出迎え、政府関係者であることを示すGのマークが控え目に描かれたビジターパスを男のスーツの胸ポケット

にクリップで留めた。

男は、空港職員に「依頼した食事だが？」と尋ねた。

「はい、問題ありません。空港理事の名前でオーダーしてあります」

職員は慇懃いんぎんな態度で応じた。職員専用通路を抜け、政府専用のVIPルームへと案内される。壁際には、すでに紹興酒しょうこうしゅが用意されていた。

成田へ来るたびに、ほろ苦い気分には浸るようになる。いつも、初めてここから海外に飛び立った日のことを思い出すのだ。公用ビザが輝いていた。自分は、若き外交官として理想に燃え、世界を変

えてやる、そう思っていた。

そして今、現実<sup>じつじ</sup>に打ちのめされる。あれから三〇年<sup>さんじゅうねん</sup>が経過<sup>けいこ</sup>し、冷戦<sup>れいせん</sup>が終わって、何が変わった？

そう、世界は変わらなかつた。だが自分は変わった。老いて、ゴルフとワインの蘊蓄<sup>うんじく</sup>だけは豊富な<sup>ほんやう</sup>官吏<sup>くわんり</sup>となつた。世界を変えようという高貴な理想<sup>こうき</sup>はとうに潰<sup>つぶ</sup>え、ゴルフのスコアを上げることに汲々<sup>きふきふ</sup>とし、政治家<sup>せいじか</sup>を掌<sup>てのひら</sup>の上で踊らせることが生き甲斐<sup>かひ</sup>になつた。怠慢<sup>たいまん</sup>で変化<sup>へんげ</sup>を嫌う、無駄遣<sup>むだち</sup>いとパーティ<sup>ぱーてい</sup>が商売<sup>しょうばい</sup>の、ただの組織<sup>しうし</sup>の駒<sup>こま</sup>に墮落<sup>だらく</sup>したので。

二言目<sup>にげんめ</sup>には、北方領土<sup>ほくぱうりやうと</sup>返還<sup>へんげん</sup>の可能性<sup>かんのせいのう</sup>を説き、竹島問題<sup>たけしまんだい</sup>の複雑<sup>ふくざ</sup>さを訴<sup>う</sup>える。どっちにも解決<sup>けつげつ</sup>策<sup>さく</sup>などない。解決<sup>けつげつ</sup>されても困<sup>まど</sup>る。それでは外務省<sup>がいむしやう</sup>の存在<sup>そんざい</sup>価値<sup>かち</sup>がなくなるからだ。

問題<sup>もんだい</sup>が永遠<sup>えいゑん</sup>に複雑<sup>ふくざ</sup>化<sup>か</sup>することこそが省益<sup>しやうえき</sup>なのだ。自分<sup>じぶん</sup>たちは生涯<sup>しやうまい</sup>、日本外交<sup>にっぽんがいしやう</sup>のために戦<sup>いくさ</sup>い、国際政<sup>こくさいせい</sup>

治<sup>ち</sup>の最前線<sup>さいぜんせん</sup>で戦<sup>いくさ</sup>つたことを誇<sup>こほ</sup>りにどこかの研究機<sup>けんきゅうき</sup>関<sup>かん</sup>や大学<sup>だいがく</sup>へと天下<sup>てんか</sup>つていく。

でも、自分が実際<sup>じつざい</sup>やつたことは、何もない。この三〇年<sup>さんじゅうねん</sup>、交渉<sup>こうしやう</sup>と呼ぶに相応<sup>ふさわ</sup>しい仕事<sup>しごと</sup>などなかつた。そこらの駅前語学<sup>せきぜんごがく</sup>学校の講師<sup>こうし</sup>でも務<sup>つと</sup>まるような、退屈<sup>たいくつ</sup>なセレモニ<sup>セレモニー</sup>の通訳業務<sup>つうやくぎふく</sup>だけだ。やれチャイナスクール<sup>チャイナスクール</sup>だ、北京ウオッチャー<sup>ペキンウォッチャー</sup>などと、おこがましい。

部屋<sup>へや</sup>には、出発<sup>でふつ</sup>と到着<sup>とちやく</sup>情報<sup>じふほう</sup>を表示<sup>ひょうじ</sup>する液晶モニター<sup>けいしんモニター</sup>がそれぞれ置いてあつた。たかがこの程度<sup>ていど</sup>の情報<sup>じふほう</sup>を表示<sup>ひょうじ</sup>するのに、32型<sup>さんじゅうに</sup>モニター<sup>モニター</sup>を二台<sup>ふただい</sup>も並べる理由<sup>りゆう</sup>がわからなかつた。

この部屋<sup>へや</sup>にあるものは、基本的に税金<sup>ぜいきん</sup>で購入<sup>かんとん</sup>されたものだ。この不便<sup>ふびん</sup>極<sup>ごく</sup>まりない欠陥<sup>けつかん</sup>空港<sup>くうこう</sup>を使い続けるために、国<sup>くに</sup>が投<sup>な</sup>じた膨大<sup>ぼうだい</sup>な国家<sup>こくが</sup>予算<sup>よざん</sup>を思<sup>おも</sup>つた。

ドア<sup>ドア</sup>がノック<sup>ノック</sup>され、また先<sup>ま</sup>ほどの空港職員<sup>くうこうしやくいん</sup>が現

れた。

「ただいま着陸しました」

「ありがとう。警備はよろしく頼む。決して一般乗客の目に触れないようにな」

職員が「承知しております」とドアを閉めて出て行く。いつものことだ。彼らにとつては、珍しくもない。もつとも、乗換トランスフェットの客に対して、これだけの神経を使うことは滅多にないだろうが。

しばらくして、やっと客人が現れた。五人の制服警官と、同数の私服警官に囲まれていた。

男は、その老人に軽く会釈すると、警官が全員部屋を出てドアが閉まるまで無言で待った。そして、「旅はいかがでしたか？」と流暢りゅうちやうな北京語で尋ねた。

「ファースト・クラスへのアップグレードに、モントリオールからは四人もの私服警官の護衛が付いた。何というか、大げさだな」

老人は、クイーンズ・イングリッシュが少し入った英語で応じた。

「貴方がリクエストなさったんですよ。北京行きに日本のエアラインと日本政府の庇護を求め、成田で休息することを。ところで、英語の方がよろしいですか？」

「そうしてくれ。どうも、外国人と母国語で話すのはしつくりこない。それに、もう二度と英語を使う機会もないとなるとな」

男は、老人にソファを勧めた。

「紹興酒はいかがですか？ たいした銘柄じゃありませんが」

「ただだよ」

男は慣れた手つきで、グラスに紹興酒を注いで、テーブルに置いた。毒が入っていない証あかしに、自分にも用意し、先に唇を付けた。

「お痩せになりましたね？」

「刑務所に一〇年もいたんだぞ。太りようもないだろう。どこかで会ったかね？」

「ええ。あるパーティで見かけました。私が上海の領事館に赴任していた時ですから、九〇年代の初めだと思います。貴方の絶頂期だった。あの頃の貴方は、輝いていた」

男は、尊敬も軽蔑もなく、素直に言った。

「ふーん、君はどういう人間なんだね？」

老人が興味ありげに聞いた。

「私？ 取るに足らない凡庸な外交官ですよ。強いて言えば、人事ウオッチャーです。人民日報を丹念に拾い読みし、現れた名前をワードカードに書き留めてファイリングしていく。地味で、退屈な仕事です。でも、私のような人間にとって、貴方が持っている情報は宝の山に等しい」

「君らにとってはな。北京の連中にとっては、時限爆弾みたいなものだ。私が生きて帰ることを望

んでいる連中が果たしてどのくらいいるか」

「どこにでも非主流派はいる。彼らにとって、貴方の存在は大きい。仮に全くの偽情報でも、貴方という固有名詞が付けば、いかにもな話になってしんぴょうせい信憑性を帯びる。昼食をご用意してありますが、いかがですか？ 中華です。日本人向けの味付けですから、お口に合うかどうかは解りませんが」

老人は、それはいい、という顔で頷いた。

「嬉しいね。まともな食事でありつけるのは、今日が最初で最後だろう。北京に降り立った途端、私はもともと存在しない人間になり、そのまま行方不明になる」

男は、そうなるだろうな、と同意して頷いた。

「カナダ政府の決定は残念です。彼らも、中国との貿易関係は大事なのでしょうが……」

「いやあ、カナダ政府には感謝しているとも。知らん顔をして強制送還しても良かったのに、国内

犯罪者として、一〇年以上も刑務所で護まもつてくれた。何か、書くものはないかね？ ペンと紙でいい」

老人はふと思いついたように言った。男は、ブリーフケースを開けて、ボールペンとワードカードを出した。

「ワードカードなんぞ使っているのか？ 今時」

「ええ。便利ですよ。パソコンみたいにバッテリー切れを心配する必要もないし、起動に時間を食うわけでもない」

老人は、部屋を見渡した。

「この部屋に盗聴器や隠しカメラは？」

「どうぞでしょう。空港施設内ですから、仮に盗聴器を仕掛けても、外でモニターするのは難しいでしょう」

老人はボールペンを走らせて、アルファベットで名前と電話番号を認めた。

「彼に電話して、ライラックからの手紙を読みたいと告げる。それで通じる。刑務所にいる間に、自伝を書いた。それを、三人の弁護士に預けてある。その一人だ」

「いわゆる保険というヤツですね」

「最初は、もちろんそのつもりで書き始めたんだ。だが妙なもので、書いているうちに神父相手に懺悔げしているような気分になったよ。自分が陥れ、海に沈めた連中のことを思い出し、後悔もした。

私は、ただの悪党だ。それ以上の存在じゃない。

そりゃ、中南海チヨンナンハイには、私でも裸足はだしで逃げだしたくなるような悪党どもが棲んでいるが、だからと言つて、私がやったことが許されるわけじゃない。罰は受けるよ。本来なら、銃殺刑を二〇回ばかり喰らつてもおかしくはない」

「ライラックがお好きなのですか？」

男は、話題を変えた。その言葉が本心からのもの

のかどうか疑わしいと思つたが、それを詮索しても意味は無い。彼も年齢なりに人格を備えたということだろう。

「独房の、小さな窓のずっと先に、ライラックの木が植えられていた。ライラックだということを知るのに三年かかったよ。ところが、よく見えななんだ。離れていて。だから私は、看守に頼んで、その何の変哲もない木の写真を季節ごとに撮影してもらつた。独房の中でその写真を眺めて、季節の変化を知るのは楽しかった」

二人はその後、空港内レストランで手配した上海料理を食べながら、中国の最近の政治状況に關して意見を交換した。男にとっては、一〇年分くらいの情報を書きできるような、新鮮で膨大な情報であり、老人にとつても、愉快なひとときだった。

だが、食後のコーヒーを嗜むたしな余裕はなかつた。

北京行きの出発時刻が迫つていた。

「こんな結果になり、残念です」

男はそう言つて、老人を送り出した。満足し、納得した表情だった。二人はまるで半生の親交を持つ旧友のように抱き合つて別れた。

その後日本政府は、老人が北京で日航機を降りたことは確認できたが、そこまでだった。

彼の帰国は、中国でも、当然その外でも、報じられることはなかつた。老人の存在は、闇の中へ消えていった。外交官の元には、老人が認めた肉筆の手記のコピーが二〇〇〇枚ほど残された。

## 第一章

林徳偉海軍少佐は、その日、特別な朝を迎えていた。緊張のあまり、歯ブラシを二度床に落とした。子供を学校に送り出した時も上の空だった。バスに乗り、中南海に近い第504海軍ビルに着いた時には、緊張で口の中がカラカラに乾いていた。一時間待たされ、士官らが秘かに「処刑室」と呼ぶ小部屋に案内された。被験者に心理的圧力を与えるために、あえてそういう造りになっているという噂だった。小さな窓から差し込む光は被験者の顔を直撃し、逆に試験官の顔は暗く沈む。

机の上には、使い込まれた検査器具が無造作に置かれている。まるで拷問用具だ。試験官は、被

験者を苛立たせ、焦らせるためにわざとそれらを並べておき、自らは遅れて現れると聞いていた。

「試験官のペースに引き込まれるな」が、先輩の助言だった。

やがて、忙しい足音が響いてくる。扉が開き、白衣を着た初老の男性が、ファイルを小脇に抱えて現れた。

「遅くなってすまない。林少佐？」

男は、淡々とファイルを開きながら、名前を尋ねた。

「はい、林徳偉海軍少佐であります」

「形式的なものだ。リラックスしてくれ。リラッ

クスという発音で合っているよね？」

「はい」

と頷きながら、外来語の発音など気にすることもないだろうにと思った。中国人同士で通じれば構わない。

試験官は、少佐にシャツの袖を捲るよう命じ、心拍計や血圧モニターを繋ぎ、計器の電源を入れた。

「ポリグラフの経験はあるかね？ まあ普通はな  
いよな。基準点を出すから、全てハイで応えてくれ」

試験官が右手にボールペンを持ち、椅子に座った。計器からロール・ペーパーが吐き出されてくる。いったい何十年前の機械だろう。

「生まれは、一九八二年、八月二九日？」

「はい——」

生まれ育った故郷の棚田たなだの風景が  
瞼まぶたに浮かんだ。

内陸の貧しい故郷だった。そこで彼は、常に一番の成績で、成績優秀者として村から軍学校への推薦状を勝ち取った。

「海軍は好き？」

「はい——」

外の世界を知りたかった。渴望のようなものだった。だから海軍士官学校へと進んだ。

「陸軍は嫌い？」

「はい——、ああいいえ、別に悪感情はありません」

「取り纏つかんう必要はない。これは基準点を取るための質問だ。妻以外に愛人はいる？」

「はい——」

妻は、素直を絵に描いたような女だった。自分には過ぎた女だ。

「君は同性愛者？」

「はい——」

針が激しくぶれるのが、被験者からも見えた。

「うん。結構、君は異性愛者だ。ええと、ビデオ、ビデオと……」

試験官は、テーブルの引き出しを開け、サムソンのデジタルビデオを取り出し、テーブルに置いた。カメラを被験者に向けて、録画ボタンを押した。

「さて、ここからは、まあ精神医学者による身上調査兼カウンセリングだとも思ってくれ。君の考課に影響することはまずない。経歴を見ると、内陸部の出身だね。失礼だが、普通なら、出稼ぎ労働で一生が終わるような貧農の出だ。君が学業優秀だったことには理由があるのかね？」

「父は、学のない農民でした。ですが、『子ども達には、最高の教育を受けさせる』が口癖で、そのために分不相応な借金をしていました。自分は、おきなこころ幼心に、その期待に応えるのが義務だと思うよ

うになりました」

「なるほど。海に縁のない君が、陸軍ではなく、海軍を志願したのは？」

「陸軍より給料がいいし、自分は外の世界に飢えていたからです」

全く正直な動機だった。

試験官は机に覆い被さるようにしてファイルを捲めつた。

「君は何か特殊な才能を持っているそうだね？」  
「特殊かどうか……。同僚は少し大げさに言いますが、アメリカ英語と、イギリス英語を使い分けられます」

「ほう、あの確か、クイーンズ・イングリッシュとかいうやつかね。君は、聞き分けられるだけでなく、喋れるのかね？ どうやって？」

「別に秘密にするような謎はありません。自分は海外の刑事ドラマを見るのが好きです。最初は

英語の勉強のために見始めたのですが、そのうち、アメリカ人とイギリス人が喋っている言葉が微妙に違うことに気付いて、自分で喋った英語を録音してみたのがきっかけです」

「語学学校に通ったとか、イギリス人の友達がいるとかではないのかね？」

「いえ、外国人の友達はおりません。友好訪問の寄港地で、メールアドレスを交換した士官はおりますが」

試験官の視線が一瞬、ロール・ペーパーの針を睨んだ。

「しかし、君ほどのキャリアなら、外資企業も引く手あまただろう」

「『社会のために尽くせ』が父の口癖でした。将来のことは解りませんが、今は、軍でキャリアを磨くのが自分のためにもなっています」

「優等生的発言だな。新しい職場に関して、何か

不安はあるかね？」

「推薦していただいた上官の期待に応えたいと思います。三軍からとりわけ優秀な語学成績者が選ばれてきているとのことなので、彼らとの交流も楽しみです」

「いざとなったら、君はその口で、合衆国大統領に、宣戦布告を伝えることになる。あるいは核攻撃の脅迫をすることになる。われわれの指導者がどんなに愚かな発言をしようが、私的感情に流されることなく任務を全うする自信はあるかね？」

少佐は、一瞬返答に詰まった。ポリグラフに反応が出た。

「率直に申し上げてよろしいですか？」

「無論だ」

「この任務の任期は三年と聞いております。米中関係は最良とは言えないまでも、良い関係にあります。言葉の応酬はともかくとして、われわれが

アメリカと戦争するなど、あり得ないことです。考えたこともありません」

「確かにな。……子供を私学に通わせたいと思つたことは？」

「幸い、自分らは軍のパートで暮らしておりまして、皆、向学心が高く、公立でありながらも高い水準の教育を受けております。公教育に不満はありません」

「だが、通わせようと思えばできるだろう？ 君の奥さんは、君の四、五倍は稼いでいるようだし。勤務先はどこだっけ？」

「特許会社です。主に外国向けの特許申請を扱う特殊な会社です。語学力が必要なので、いい給料を貰っています」

少佐は、妻と初めて出会った日のことを思い出した。レンタル・ビデオ屋でのことだった。海外ドラマのコーナーで、互いに同じ棚のシリーズを

見ていることに気付いて、立ち話をした。翻訳字幕の解釈の話になり、そのまま喫茶店に移動して閉店まで話し込んだ。一週間後には、彼女の部屋に転がり込んで朝まで過ごす関係になった。

「親孝行した？」

「父が亡くなる前に、孫の顔を見せられました。母は、故郷で母の姉夫婦と同居して元気に暮らしています」

「それは大変結構」

試験官は、ボタンとファイルを閉じ、ビデオを止め、ポリグラフの電源を落とした。

「合格だ、少佐。中南海へようこそ！ 君の栄達えいたちの扉がまた一つ開いたというわけだ。この後も順調な出世を祈っているよ」

試験官は、少佐の身体からコード類を外し、ロール・ペーパーをちぎってファイルに挟み込むと、静かに席を立ち、部屋を出て行った。

少佐は、この試験を受けた誰もがそうするように、フウーと大きな溜息を漏らした。これで最後の関門をクリアだ。この仕事は、その重大さとは裏腹に、実は退屈な任務だと聞いていた。終日、雑誌を読んで過ごすだけで、半年も任務が続けば、五キロは太るといふ噂だった。

早速、食事制限し、運動も始めなければならぬ。太るのは嫌だ。妻にとつても娘にとつても、格好いいパパでいたかった。せめて、あと一〇年は。

中国漁政310船（二五八〇トン）の指揮を執る艦長の賈招雄チャウシャウシヨウ、中佐は、ご自慢の作戦室の大型液晶テレビに、日本の衛星チャンネルを映してみせた。ちょうど、お昼の時間帯で、政局絡みのニュースを流していた。

今日は風のせい、電波も安定している。衛星

のパラボラアンテナは、艦が針路を変えても自動的に狙った衛星を追尾するとかで、映像はほとんど乱れることなく流れていた。

作戦室の上座に座る王洪波ワンホン海軍少将は、テレビの音を聴きたかったが我慢した。テロップでもある程度のこととは解る。

青ざめた表情の尹語堂インユイタン大尉が現れると、少将は「大丈夫か？」と声を掛けた。大尉は涙目だったが、口元を右手の甲で拭いながら「はい、なんとか……」と応じた。彼は分析官で、本読みが仕事だ。率直なところ、スタビライザーを装備して、ほとんど揺れることのない新鋭艦で船酔いを起こすなど信じられなかったが、船医の話では、そういう体質の人間もいるとのことだった。

少将は、副長の鄒浩少佐ツォウハオにテレビを消して部屋を辞すよう命じた。それから、上座から立ち上がり、全員の注目を求めた。

「諸君、メモは無しだ。ここでの会話は、諸君らの記憶のみに留めてもらう。ちなみに今映っている日本のニュースは、国会で重要法案が流れ、国会の解散が近いことを報じていた。当初はこの作戦に三ヶ月は割けるはずだったが、そんな余裕はなくなった。完成までの猶予は二ヶ月程度。おそらく、寝る暇もなくなるだろう。われわれの作戦目標が何であるかに関しても、ここでは話せないが、今ここにいる全員が、それぞれの立場で参加することになる。困難な作戦になるだろうが、やり遂げるしかない。察しのいい諸君だから、言わずともそれぞれの任務は解るだろう。事前に断っておくが、情報管理に関して、高級幹部を任命し、諸君らの部隊を監視・指導することになる。部隊に戻った時、本艦での任務に関しては決して口外しないように。では、艦長、現在のわれわれの位置関係と、本作戦の目的を説明してくれ」

少将が腰を下ろすと、賈艦長は自ら操作パネルを扱い、艦尾側の壁に掛けられた五〇インチのスクリーンに、カラーのリーダー画像を呼び出した。「ご覧ください。現在、本艦の針路方向が真上になっています。これは広域映像ということになりますが、向かっている真上に見える大きな島影が釣魚島デフオユイダオ。まだ三〇キロはあります。本艦はすでに日本側が主張しているところの接続水域に入っております。そして、この右側に見える輝点グレイが、その日本側の巡視船です。島の反対側にもう一隻がいるはずですよ」

艦長は、レーザー・ポインターで、その巡視船を指し示した。

「さらに、この左端をご覧ください。ここにも小さな島影が映っておりますが、釣魚島からおよそ三〇キロ北東に位置する黄尾嶼ファンウェイユイ（久場島くばじま）です。かつてはアメリカ軍が射爆場として利用していま

したが、最近はほとんど動きはありません。ここを演習エリアに設定して、われわれを刺激することを恐れてのことでしょう。そして、一番下。われわれの真北に位置しているのが、今回の任務で重要な役割を果たす漁船「赤」、漁船「青」の二隻です」

「ありがとう艦長。この作戦の目的は二つある。

実際の訓練は、大陸に近い場所です。似た島を見つけて行くことになるが、この二隻の漁船には、レーダー波の受信装置が搭載されており、日本の巡視船が、島を挟んだ反対側にいる時、漁船の船影が巡視船のレーダーで捕捉できるかどうかを検証するのが狙いだ。そして、この漁政船の目的は、味方の漁船が悟られずに接近できるように、巡視船を島の南側に誘き出すことだ。そして諸君は、巡視船の戦術を余すことなく会得し、戦場の雰囲気をつかみ、いざという時の作戦に生かすために乗って

貰った。巡視船の動きをコントロールして封じ込めないことには、この作戦の成功は無いものと思ってくれ。艦長、どのくらいまで島に近づける？」

「お望みとあらば、日本が領海と主張する線より内側に入りますが？」

艦長は、いかにもそれをやらせてくれという表情だった。

「その機会はいずれ訪れるだろう。今は、刺激せずに済ませたい。島影が一番綺麗に見えるのは何時間後くらいかな？」

「はい、陽光の関係から、本艦がこの位置に来た時ですから、およそ九〇分後辺りかと」

艦長は、レーザー・ポインターで、その位置を指し示した。

「まだ時間はあるが、ブリッジに上がるかね？艦長、どのくらいの追いかけてこくなる？」

「巡視船が漁船の接近に気づかなければ、最低で

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。